

ツイッターの一文から広がる翻訳の世界

—初級クラスでの翻訳活動の実践—

行木 瑛子
ロンドン大学 SOAS

要旨

近年の言語教育において翻訳が再評価されている。本実践報告では、翻訳活動の可能性を探るため、ロンドン大学 SOAS の初級日本語学習者に行ったツイッターを使った翻訳活動について報告する。クラスでは日本の著名人数名のツイッターを比較し、各著名人に特徴的な言語使用等を比較した上で、2名のツイートを日本語から英語に翻訳した。紙面の都合上、本報告では実際のクラスの実践内容・クラスディスカッションのみを紹介する。クラスに参加した学生の文化・言語背景が多様だったことなどから、この結果の一般化には注意を要するが、この実践の結果、(1) 翻訳活動を通して、絵文字、漢字の役割、筆者のパーソナリティ、ユーモアなど、文法・語彙の指示的意味以外の事項を考察・ディスカッションする機会を与えられること、(2) 教師側の工夫次第で、初級学習者にもオーセンティック (authentic) な教材を使った翻訳活動が十分可能であるという示唆が得られた。

【キーワード】 翻訳、翻訳活動、初級学習者、ツイッター、オーセンティック

1 はじめに

言語教育における翻訳は「伝統的な教授法」とみなされ、倦厭されることも多いようであるが、近年では翻訳の役割が再評価されている (例: Cook, 2010)。本報告ではロンドン大学 SOAS の初級日本語学習者に対して行ったツイッターを使った翻訳活動を報告し、言語教育における翻訳活動の可能性について探る。これは、言語教育における翻訳をテーマにした博士課程の研究¹の一環として、初級・中級学習者に各5回ずつ、計10回行った翻訳クラスのうち、初級の第1回目のクラスに関するものである。本報告では、まず翻訳活動の再評価についての先行研究を概観し、その後、今回の実践の対象者・方法、実践内容を紹介する。なお、本報告で「翻訳活動」とは翻訳行為のみならず、翻訳前後のディスカッションやその後の自らの翻訳について振り返らせる活動等も含む。

2 先行研究

大学の言語教育において翻訳は長年使用されてきた (Malmkjær, 1998)。ただし、クラス内の翻訳は、語彙や文法の正確さに重点を置いた文法訳読法かそれに近いものが多く、翻訳をしても流暢に話せるようにならない、文脈がないなどの批判も受けている (Cook, 2010; Malmkjær, 1998)。翻訳は伝統的な教授法と捉えられることが多く、また、翻訳活動を言語のクラス内で行わない大学も多いようである。

ただ、1990年頃から応用言語学分野でパラダイムシフトが起こり、学習者は目標言語

のネイティブスピーカーになるために言語を学ぶのではなく、目標言語と自言語 (own language) 間の third place (第三の場所) (Kramsch, 1993) を探し、文化・言語間の mediator (仲介者) (Coste, Moore, & Zarate, 2009) や intercultural speaker (異文化間話者) (Byram, 1997) になるために学ぶのだという考えが唱えられるようになった。その中で、目標言語のみを使用し、ネイティブスピーカーを規範とする言語教育が批判を浴び、言語教育における学習者の自言語の役割を捉えなおす動きもでてきている (Hall & Cook, 2012)。また、2つ以上の言語が関係し、言語間・文化間の問題を扱う翻訳を再評価する動きも見られるようになった。例えば、Cook (2010) は、従来の翻訳活動に対する批判は実証データがなく、根拠のない仮定に基づくものであると述べている。Malmkjær (1998) も、従来の批判は主に文法訳読法に対するものであり、翻訳は言語間の干渉を抑えるなどのプラスの効果があると述べている。この流れを受け、近年では、コミュニケーション等に重きを置いた翻訳活動など、言語教育における翻訳の可能性を探る動きも見られるようになっており (e.g. Carreres & Noriega-Sánchez, 2011)、本報告もこの流れに沿うものである。

3 実践方法

本実践では、ロンドン大学 SOAS の初級学習者 21 名に対して 2 時間のツイッターを使用した翻訳クラスを行った。初級学習者を対象としたのは、初級・中級レベルでは暗記や文型練習に重きが置かれ、考えさせるタスク (cognitively demanding tasks) が欠如していることが指摘されており (Kem, 2002)、翻訳はこの考えさせるタスクを初級学習者にも提示できるのではと考えたためである。例えば「wife」という単語も「妻」「家内」「嫁」等様々な選択肢があり、その選択により読み手に与える印象も変わる。翻訳を通して、学習者の既存の言語知識を活用しつつ、文脈に合わせた翻訳を考えさせることは初級学習者にも十分可能な、考えさせるタスクとなるのではと考えた。対象者は、週 7 時間または 10 時間の日本語集中コースを受講する日本学専攻の 1 年生の学生である。学生は多様な言語・文化背景を持っており、英国以外の国籍の者は 3 名、英語が第一言語ではないでないと答えた学生も 1 名いた。また 21 名中 18 名が英語・日本語以外の言語を話せるか学んだ経験があると答えた。本実践を行ったのは学生が日本語の初級クラスを受講し始めて 7 週目、教科書「みんなの日本語」(Three A Network, 1998) 第 11 課まで学習した時点であった。クラスは約 2 時間、通常クラス外で行い、任意参加であった。クラスでは日本語・英語どちらの使用も可としたが、ディスカッションは英語で行うことがほとんどであった。なお、参加人数が多かったため、クラスは 2 つに分けて行った。本報告は 1 つ目のグループに関するものである。

クラスをデザインするに当たって、以下の 3 点を重視した。まず、実際の言語使用を示すため、教材はオーセンティック (authentic) な教材とした。具体的には教材としてはツイッターを選んだ。理由は、一文一文が短く、初級学習者でも扱いやすいこと、実際の言語使用であること、学生の興味を惹く媒体であると思ったからである。また、ツイッターの文体の多様性を見せるため、翻訳タスクのツイートだけでなく、複数のツイッターを提示する工夫もした。次に、翻訳のタスクはできるだけ初級学習者でも日常で実際に起こり得る状況を設定するようにした。最後に、文法・語彙以外にも注目させるため、原文と翻訳文の読み手や目的、フォーマリティなどのコンテキストもディスカッションさせるようにした。

なお、この実践の後に、学生はクラスで扱ったものと類似のテキストの翻訳の宿題と、ラーニングジャーナルを提出している。これらを通して、このクラスでの学びについて非常に興味深い意見が聞かれたが、今回は紙面の都合上、クラスディスカッションのみに焦点を当てる。

4 クラスの流れ

4.1 ウォーミングアップ

まず、ツイートの多様性を見せるため、様々なツイッターを紹介する活動をウォーミングアップアクティビティとして導入した。授業前に有吉弘行（タレント、以下「有吉」）、ROLA（タレント）、孫正義（企業経営者、以下「孫」）、きゃりーぱみゅぱみゅ（歌手、以下「きゃりー」）に関する情報を集めるよう指示し、まずこれらの人物について調べたことをクラス全体で共有した。この4名はクラス実施当時、日本語のツイッターのフォロワー数で上位10名に入る4名であった。その後、名前を伏せたこの3人（有吉・ROLA・孫）のツイッターをみせ、これは誰が書いたと思うか、どうしてそう思ったのかをペアで考えた。学生は全員書き手を予想することができたが、その理由としてはROLAは、「絵文字や顔文字がある」²、「漢字が少ない」、「英語がある」など、孫については、「漢字が多い」、「ツイートをあまりしていない」、「一つ一つのツイートが長い」など、有吉については、「句読点が多い」、「孫より文字数も少なくフォーマルでない」、「ツイートの数が多く、孫のような忙しいビジネスマンはできないはずだ」などの意見が出た。その後、別の時期にポストされた孫のツイート（仕事中のツイートとゴルフをしている間のツイート）を比べ、同一人物でも随分印象が変わるなどといったことを話し合った。

4.2 タスク1の導入

次に翻訳タスクを導入した。タスクは「あなたのイギリスの友達はきゃりーのファンです。友達はきゃりーのツイートを翻訳してくださいと言いました」というもので、以下の内容のツイートを翻訳した。

大阪のみなさんからのプレゼント！ありがとうございます♡手紙もプレゼントも時間をかけて全部見ます！(((o(* ▽ *)o))) (きゃりーぱみゅぱみゅ[pamyurin]. 2013, February 2)³

クラスでは、ツイートをクラス全体で読み、意味を確認したあと、このツイートのコンテキストを探るために、このツイートと自分たちの翻訳文の読み手は誰か、どういうフォーマリティか、目的は何かなどを話し合った。学生の意見を発表してもらったところ、原文のツイートの目的は、「ファンに感謝するため」、「また来年もプレゼントをもらうため」、読み手は「大阪のファン」、「潜在的なファン」、フォーマリティは「フォーマルだけどカジュアル」などといった意見が出た。自分たちの翻訳については、読み手は「友達」、目的は「友達がわかるようにするため」、「逐語訳では十分でなく、意味とコンテキストを伝える必要がある」、フォーマリティについては「カジュアルだけど丁寧だから難しい」という意見が出た。また、以下の3点についても話し合った。

- (1) なぜ1文目は「プレゼント！」となっており「です」がないのか

- (2) きゃりーとファンとはどういう関係か
- (3) きゃりーはどんなパーソナリティだと思うか

(1) については、「カジュアルさを出すため」、「ただ、2 文目の『ありがとうございました』で『ございました』を省くと、実際の友達でない限り、カジュアルすぎるのではないか」、「『ございました』とつけることで、本当に感謝している感じがでるのでは」、「ただ、ハートをつけてあまりフォーマルになりすぎないようにしているのでは」などの意見が出た。(2) のファンとの関係については、「友達と思わせたい」、「ファンの中のモデルになりたい」、「ファンとは特別な関係で、友達だけでなく尊敬 (respecting) の気持ちもあるのでは」などという意見が出た。(3) のパーソナリティについては、「感謝している」、「誠実」、「かわいい」などが出た。

上記について話し合ったあと、クラスではこのツイッターを翻訳した。まず 1 人で翻訳し、ペアで比較した後、何組かがクラスの前で発表した。以下は学生の翻訳例である。

- (1) I've got the presents from everyone in Osaka! Thank you soooooooooo much ! ハート It will take some time but I will look at every single letter and present!;D ^_^
- (2) Thank you so much for all the presents I received in Osaka! I look forward to reading all your letters and looking at the gifts (((o(* ∇ *o))).
- (3) Here are the presents from everyone in Osaka! Thank you so much ♡ I will take my time to read your letters and appreciate your gifts (((o(* ∇ *o)))

(1) のペアは『thank you soooooooooo much』で『ありがとうございました〜』の部分を表したと述べた。また、フォーマリティについては、「イングランドではそこまでフォーマルにする必要はないからカジュアルにした」と言い、また、「絵文字は英語話者は分からないから、英語の絵文字にし、でも 2 つつけて、同じようなエネルギー (energy) を表した」と述べた。(2) のペアは、「かなりフォーマルに訳したがそれは自分の年齢 [注：このペアの学生の 1 人は 30 代] も関係しているのでは」と分析していた。また絵文字については「きゃりーのファンなら絵文字についての知識があるから」とそのまま残し、(1) のグループとは異なる戦略をとっていた。(3) のペアは写真に注目し、「1 文目は写真と合わせて理解できる文章にした」、「絵文字はファンなら分かんと思い、そのままにした」、「2 文目は appreciate という単語を使って、強い感謝の気持ちを表した」と述べた。このように、各ペアが異なる翻訳をしていたため、クラス全体で様々な翻訳戦略とその理由を共有・ディスカッションした。

4.3 タスク 2 の導入

次に、「あなたのイギリスの友達は有吉のファンです。友達は有吉のツイートを翻訳してくださいと言いました」という 2 つ目のタスクを導入した。翻訳文は以下のとおりである。

酔って。参加。結果。最悪。帰宅。。。(有吉[ariyoshihiroiki]. 2013, Oct 12)

これは飲みに行ってから書いたツイートだと文脈を説明し、語彙を確認した。その後、以下の 3 点についても話し合った。

- (1) なぜ漢字を使っているのか。漢字にはどのようなイメージがあるか。
- (2) きゃりーの文体とどう違うか。どう違いを翻訳するか
- (3) 有吉はどんなパーソナリティだと思うか。

まず、(1) の漢字の役割については、「まじめ (serious) なイメージ」、「先生がする指示 (instruction) のよう」、「(酔っているから) 考えが途切れ途切れになっているのではない」、「酔っているようにみせるためにわざとやったのではないか」、「日本語は同音異義語が多いから、漢字で書かないと分かりづらくなるのでは」、「平仮名より一つ一つの言葉にリズムがでるのではないか」、「4 コマ漫画のようだ」など様々な意見が出た。(2) のきゃりーとの違いについては、「有吉のツイートはどちらかという唐突で、何かを和らげようという気がない」、「特定の読み手に向けたものではない」、「ファンとの関係性がない、感謝も示していない」、「飲み会に行って、最悪と言うのは少し失礼だ」、「短い文で、怒っているようだ」という意見や、有吉がコメディアンということに注目し「ただのジョークなのでは」という意見もあった。(3) の有吉のパーソナリティについては、きゃりーが「愛される感じ」「フレンドリー」なのに対し、「愛される感じではない」、「ツイートが4 コマのようなので自らが漫画のキャラクターの中のおもしろい人間のようにしている」など意見が出た。

このツイートについても同じようにまず1人で翻訳し、ペアで比べた後、何組かがクラスの前で発表した。翻訳は以下のとおり様々な翻訳が出た。

- (1) Got drunk. I joined in. Result? The worst. Going home now...
- (2) Drunk. As a result, I'm worse for wear. I'm going home...
- (3) Mission- get drunk. Friend Acquired. Mission- Success. State - Very ill. Time to go pass out.
- (4) Got drunk. Took part. Fell apart. Went home...

(1) のペアは、「ツイッターが短いので、できるだけ英語も短くしてキーワードだけ出した」と言っていた。(2) のペアは、『『参加』の部分は言わなくても分かるのではと思って省いた』と述べた。(3) のペアは、「有吉がひらがなでなく漢字を使ってるうまくユーモアを出しているの、それを表現するために、『Mission』という表現を使ってみた」と言っていた。(4) のペアは、『最悪』を『fell apart』にして韻を踏み、短い原文のリズムを再現しようとしていた。これについては、「ユーモアも出ていていい」という意見が他の学生からも聞かれた。また、ユーモアについては、「英語では映像や画像と合わせてユーモアを出すことが多いので、言葉で表現するのはなかなか難しい」など、英語と日本語のユーモアを比べた意見も出た。

このようなディスカッションをした後、宿題についての説明をし、クラスは終了した。宿題は、類似のきゃりーのツイートの翻訳で、翻訳文とともに翻訳コメントを提出させた。また、クラスの感想を記載したラーニングジャーナルも提出させた。

5 まとめと課題

本稿では、翻訳活動の可能性を探るため、ツイッターを使った初級日本語クラスでの実

践を紹介した。上記の通り、学生はツイッターの翻訳を通して、絵文字、スタイルシフト、漢字の役割や、パーソナリティ、ユーモアなど、文法・語彙の指示的意味 (referential meaning) 以外の事項についても考察し、これをどう翻訳するかをクラスメートと一緒に話し合っていた。上記の実践例は、様々な言語・文化背景と、英語という共通語を持つ学生たちの集まったロンドンの大学で行われた一例であり、これを一般化することはできない。ただ、言語教育の翻訳には、文法訳読法のような正確さに重点を置いたものだけでなく、上記のとおりオーセンティックな教材を使用した、実際の生活でも起こり得るようなタスクでの翻訳活動も可能であることが示せたのではないだろうか。また、オーセンティックな教材を使った翻訳は、日本語能力の低い初級学習者では難しいという意見もあるかもしれないが、この実践報告のとおり、日本語を学び始めて7週目の初級学習者に対しても、教師側の工夫次第で導入可能なのではないかという示唆が得られた。

注.

¹ 謝辞:本研究は、SOAS Research Scholarship、Meiji Jingu Japanese Student Research Scholarships、British Association for Japanese Studies (BAJS) postgraduate studentship、Japan Foundation Endowment Committee grant、British Council Japan Association (BCJA) Scholarship の助成を受けて実施された。

² 本報告の学生の発言は著者が日本語に翻訳したものである。

³ 原文は写真付。また、原文に絵文字はないが、絵文字の役割についても話し合うため追加。

<参考文献>

- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Carreres, A., & Noriega-Sánchez, M. (2011). Translation in language teaching: insights from professional translator training. *The Language Learning Journal*, 39(3), 281-297.
- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching: an argument for reassessment*. Oxford: Oxford University Press.
- Coste, D., Moore, D., & Zarate, G. (2009). *Plurilingual and pluricultural competence*. Strasbourg: Council of Europe.
- Hall, G., & Cook, G. (2012). Own-language use in language teaching and learning. *Language Teaching*, 45(03), 271-308.
- Kern, R. (2002). Reconciling the language-literature split through literacy. *ADFL Bulletin*, 33(3), 20-24.
- Kramersch, C. (1993). *Context and culture in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Malmkjær, K. (Ed.). (1998). *Translation and language teaching: language teaching and translation*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Three A Network. (1998). *Minna no nihongo shokyū I honsatsu [Japanese for everyone beginners I main book]*. Tokyo: Three A Network.
- 有吉弘行[ariyoshihiroiki]. (2013, 12 Oct). 酔って。参加。結果。最悪。帰宅。。。 [Tweet]. from <https://twitter.com/ariyoshihiroiki/status/389057045644574721> (9.3.2014)
- きやりーばみゅぽみゅ[pamyurin]. (2013, 2 February). 大阪のみなさんからのプレゼント！ありがとうございましたー♡手紙もプレゼントも時間をかけて全部見ます！ [Tweet]. from <https://twitter.com/pamyurin/status/297665658609606656/photo/1> (9.3.2014)